

「南島人」とは誰のことか

富山一郎

1 「お前」

クラブの前には横断幕がひるがえっていた。

Prosperity to Ryukyans

琉球人に繁栄があり、

and may Ryukyans

琉球人とアメリカ人が

and Americans always be friends.

常に友人たらん事を祈る。

パーティーのあった一週間ほど前におこなわれたペルリ来航百年祭行事で作られたものだった。ひとつひとつの文字をたんねんに読んだ上で、お前は警察署へむかって歩いた。⁽¹⁾(強調引用者)

一九六七年に『新沖縄文学』において発表された大城立裕の『カクテル・パーティー』は、米軍基地内の「パーティー」からはじまり、主人公の娘への米兵によるレイプ事件をめぐって一気にドライブがかかっていく。米兵の告訴が小説後段の展開の軸になっていくのだが、それは基地内の「パーティー」という占領状態における「平和」とい

う秩序から、米兵への喚問権すらない占領の法への転戦のプロセスでもある。そして主人公の「私」が米兵の告訴へと動く時、「私」は「お前」に変身していくのである。多くの批評が存在するこの作品の中で、主語のこの「私」から「お前」への変身もまた、議論をよんだ。

主語を構成する「お前」という呼びかけからは、とりあえず重なり合う二つの問題が引き出せる。ひとつは自己言及的な問いかけであり、今ひとつは自己への問いかけにおいて浮かび上がる命名にかかわる秩序である。そして後者は前者の前提になっている。すなわち「お前」とは、秩序からの命名であると同時に、その秩序においては居場所が与えられない領域への自己言及的な自問自答でもあるだろう。「お前はいつたい何者なのか」、そして「本当のところ私は何者か」。

またそこに、施政権の米国から日本への返還が軍事的暴力の継続でしかないことが明白になり、したがって同時に、軍事的暴力に抗う根拠がより切迫して求められるようになってきた一九六〇年代後半の状況を重ねることもできる。すなわち継続する占領状態の中で、既存の秩序に抗おうとした者が、秩序からの命名にも抗いながら自らを名乗る根拠を見出そうとする営みとして、この「お前」という言葉を考えることもできるだろう。そして、この「お前」という自問自答をくり返しながらかつて抗う根拠に向けて邁行していくプロセスにおいて、占領という秩序に抗う困難さは、抗う自己を言葉にする困難さと同居している。「お前」にかかわってこれから私が考えたいのは、大城立裕論でもなければ「カクテル・パーティー」のさらなる批評でもなく、また一九六〇年代後半の歴史分析でもなく、この困難さについてである。

人種や民族にかかわる言葉には、この困難さがまわりついでいる。圧倒的な弱勢の位置から自らを名乗るとき、その名前が人種的であろうと民族的であろうと、秩序に抗うことの困難さと抗う根拠をめぐる困難さが、その名前に貼りついでいる。そして名乗ることにかかわるこの二つの困難さにおいて、伊波普猷がいう「南島人」という名前を検討することが、本論の課題である。日本との関係の中で思索を深めた伊波普猷から、苦悩や絶望を見出す議論は多い。だがここで名乗ることの困難として検討したいのは、たんなる日本との関係というよりも、植民地主義にかかわ

る伊波普猷である。すなわち、名乗ることにかかわる二つの困難さとは、植民地状況の中での名乗りにかかわっているのである。

だが、植民者と被植民者、あるいは植民地支配と反植民地闘争という植民地状況の一般的構造の適用を、ここで意図しているわけではない。この小論における植民地状況という設定において眼を据えたいのは、こうした支配構造ではなく、個人化された「病」である。いかえれば、植民地状況において名乗ることの困難さは、一般的支配構造ではなく、個人の症状として具体的に示された「病」においてこそ問われなければならないのだ。それはまた、反植民地闘争を戦いながら精神科医として臨床に立ちつづけたフランツ・ファノンが、引き受けようとした問題でもある。

ファノンの残した叙述について、かつて「対抗と遡行」と述べたことがあるが、それは、力関係において抗いつづけることが（対抗）、同時に抗う根拠へと自己言及的に遡行しつづけることと不可分に存在していることを意味している（富山一九九六）。またこうした名乗りは、「民族文化とは、民衆が自己を形成した行動、自己を維持した行動を、描き、正当化し、歌いあげるために、民衆によって思考の領域においてなされる努力の総体である」とするファノンの民族文化理解にもつながるだろう（ファノン一九六九a・二二三）。名乗りにかかわる困難さをめぐってこれから考えようとしている課題は、くり返すが、こうした「対抗と遡行」にかかわる精神分析あるいは精神医学の問題なのである。

植民地主義は他者の系統立った否定であり、他者に対して人類のいかなる属性も拒絶しようとする凶暴な決意である故に、それは被支配民族を追いつめて、「本当のところおれは何者か」という問いをたえず自分に想起させることになる。（ファノン一九六九b・一四三）

ファノンの「植民地戦争と精神障害」の冒頭に登場するこの「本当のところおれは何者か」という問いにおいて重要なのは、「何者か」という問いに對しいかに回答を与えるのかということでもなければ、回答が与えられないとい

う表象不可能性の一般規定でもなく、それがまずは具体的な「精神障害」という困難として設定されている点にある。あるいはこういってもよい。この自己言及的な問いに、「本当の民衆はどこにいるのか」という問い、すなわち民衆を命名しようとする欲望を重ねてしまう連中に対して、ファノンには、「精神障害」という臨床的領域を突きつけるのだ。そこには、植民地戦争の中で精神科医として臨床に立ちつづけたファノンが浮かび上がる。また、闘う民衆はどこにいるのかという問いに答えを付与したり、解説したりすることではなく、とりあえず精神疾患という臨床的領域を起点に置いたファノンには、文学批評としてホミ・K・バーバが浮かび上がらせたファノンとラカンのつながりとは異なる、文字通り臨床的な実践において思考しつづけるファノンにおける精神分析、精神医学の問題が浮かび上がるだろう。

ファノンにおける精神分析あるいは精神医学の領域は、治療の問題ではなく、抗うことの困難さと、抗う根拠の困難さの問題として存在しているのである。そこには、圧倒的弱勢の位置からの反抗であるが故に、とりあえず絶望的な戦いの状況が想定されている。

数年前に独立したアフリカのある国において、われわれは一人の愛国者、かつての抵抗者^{レジスタント}を診断する機会を得た。三〇歳ばかりのこの男は、われわれに助言と鎮静を求めに来たのである。というのは、一年のうちのある日が近づくとき、不安と自己破壊の固定観念とを伴って不眠症が腰をすえてしまうからであった。その危機の日付けとは、彼が地下組織の指示に従い、ある場所に爆弾を仕掛けた日であった。その襲撃のさいに、一〇人のものが死んだのであった。

この活動家は、自分の過去の行動を否認しようと考えたことは一度もなく、彼の人格が民族独立のために払われねばならなかった代価をきわめて明瞭に知っていた。このような極限的例 (Limits) は、革命の場における責任の問題を提起している。(ファノン一九六九b:一四五)

圧倒的弱勢の位置から、抗わなければならない。そして抗うことは、「自己破壊」に結びつく。抗うことの困難さ。その「自己破壊」に耐えながら、抗う根拠を問いつづける。根拠を問うことの困難さ。ファノン「何者か」という問いは、既存秩序とその中における自己の「極限 (limite)」「すなわち秩序と自己」の両者が別物へと動きだす臨界において、発せられている。民族や人種にかかわる名前が、「何者か」という問いとかわる以上、秩序と自己の臨界において叫ばれているのであり、その名前から始まる事態は、治療の問題でも学的解釈の問題でもなく、ただ「革命の場における責任」の問題なのだ。

「何者か」という問いは、「精神障害」の中で反復される。そしてその「障害」は、治療の問題ではない。名乗ることの困難さを抱え込んでいる者たちにとって、その困難さとは、理性的に黙り込む状態ではない。端的にいつてしまえばそれは、狂気にかかわることである。この困難さが狂気として登場する時、精神分析はその傍らに肉薄する強力な言葉として登場することになるだろう。だからこそその精神分析の言葉を、徹底的に検討しなければならぬのだ。くり返すが、困難さをいかに治療するのかということが問題なのではない。人種や民族といった言葉にまわりついている狂気が聞き取られ、再度記述されていくという言語化の工程の中で、この狂気がどこに向かうのか、ということを考えたいのである。またそこでは、狂気が個人や既存の集団に限定されることなく、記述において伝染していくような連なりを想定している^⑤。

2 「個性」と言葉

日本帝国による韓国併合がなされた一九一〇年の翌年、一九一一年に刊行された伊波普猷の代表作である『古琉球』において、「沖繩人」、「琉球人」、「琉球人種」、「琉球民族」の歴史と固有性を「個性」という言葉に込めた伊波は、その一三年後の一九二四年に刊行された『沖繩教育』（一三七号）における「寂泡君の為に」で、「個性を表現すべき自分自身の言葉を有つてゐない」（伊波一九七六・三二四）という言葉にいきつく。人類学者鳥居龍蔵のタームを

流用しながら、ときには身体的特徴にかかわる人種のカテゴリも動員して構成された伊波の「琉球人種」は、その用語の根幹にかかわる「個性」という領域への言葉の喪失という事態において、停止されていくのである。それは同時に、伊波が「南島人」という言葉を使い始める起点でもあった。一九二六年八月二七日の日付がある「琉球古今記」（刀江書院、一九二六年）の「序」には、「この書に収めた十数篇は、私が一個の南島人として、主に内部から南島を見たもので、いはゞ南島人の精神生活の一記録ともいふべきものです」（伊波一九七五・六七―六八）とある。「琉球人種」から「南島人」へ。周知のように、伊波の南島という言葉には柳田國男の南島研究や南島談話会の活動が関連している。だがここでは、伊波がいきついた「個性」が語れないという場所に、議論を集中したいと思う。そして「個性を表現すべき自分自身の言葉」がないというこの伊波の眩きに、「本当のところおれは何者か」というフアノンの問いを想起しながら、議論を進めよう。

「只今申し上げたとほり一致してゐる点を發揮させることはもとより必要な事で御座りますが、一致してゐない点を發揮させる事も亦必要かも知れませぬ」。これは、『古琉球』（沖繩公論社、一九二一年）の、「琉球史の趨勢」における文章である。ここでいう「一致してゐる点」というのは、「日本人」と「沖繩人」の共通している点、すなわち「同祖」ということである。そしてそれは、この『古琉球』が「日琉同祖論」といわれる所以でもある。だが、いま目を凝らしながら読むべきは、「沖繩人」としての自己を提示しようとする伊波が、「一致してゐる点を發揮させることはもとより必要なこと」と慎重に断つたうえで展開する、「一致してゐない点を發揮させる事も亦必要かも知れませぬ」というフレーズだ。「一致してゐない」ということ、つまり違うということが、注意深く、そして凝固する決意とともに、ここでは差し出されている。「個性」とはこの言葉の延長線上に存在しているのだ。

違うのだと伊波が言い放つこの瞬間に、すべてを集中させなければならない。この違いは、琉球史の起源をめぐる問題ではない。そこには、伊波が生きる今における、沖繩住民の武装鎮圧と虐殺を準備していた自警団の記憶がある。日清戦争の時に沖繩にいた日本人は、日清戦争にともなう沖繩での内戦状態を想定しながら、軍隊とともに自警団を結成し、住民鎮圧にのりだしていた。中学校でも、教職員、生徒により義勇隊が組織され、当時、沖繩尋常中学校の

四年生であった伊波普猷も、義勇隊において射撃練習をしていた。いうまでもなく伊波が構えるその銃口は、自分の親族を含む沖縄の住民に向けられていたのである。違ふ、ということは、鎮圧されるということであり、そして伊波は、自分たちを鎮圧し、殺す位置に、動員されていたのである。またこの中学時代の記憶には、継続中の植民地戦争が重なるだろう。日清戦争から台湾領有、さらには韓国併合という継続する一連の戦争状態の中にこそ、伊波の「一致してゐる」あるいは「一致してゐない」という言葉は、存在しているのだ。

「個性」を語る言葉がないという事態は、前に存在していたアイデンティティが喪失したということではない。また「個性」から別のアイデンティティに移動したということでも断じてない。「一致してゐない」が「一致してゐる」に変わったわけではないのだ。凝視すべきはこの言葉が、殺す、あるいは殺されるという事態にすぐさま連動する戦争状態の中に、存在しているということだ。

もしアイデンティティという言葉を使うなら、それはエドワード・サイードがフロイトの『モーセと一神教』から見出した瑕疵(ひびき)にかかわる言葉である。「すなわちアイデンティティは、根源的な断絶あるいは抑圧されることのない瑕疵をとまなうことなく、自らを構成したりあるいは想起したりすることができない」のであり(サイード二〇〇三:七二)、「個性」にしる「同祖」にしる、戦争状態の耐えがたい現実を慎重に押し隠し抑圧しようとしながら、抑圧しきれない瑕疵をとまなつて提出された言葉にはかならない。「個性」において「琉球人の歴史」を描こうとする伊波の言葉は、殺す、あるいは殺されるという戦争状態の現実を抑圧しながら、瑕疵とともに生き延びる者の言葉でもあるのだ。また次のようにもいえるだろう。具体的歴史事象を「個性」の説明の根拠に持つてきてはならない。先に私が歴史的事象として説明してしまつた戦争状態は、「個性」に即していえば抑圧された領域であり、瑕疵としてのみ存在している。

ところでサイードは、この抑圧の淵から浮かび上がる瑕疵から、イスラエルとパレスティナのいまだ存在しない歴史を描こうとしている。そして伊波は「琉球人の歴史」を描くのだ。まただからこそ、サイードに投げかけられたジャクリヌ・ローズの、最大の共感においてこそなしうる決定的な問いかけが重要になる。

私たちは、アイデンティティの瑕疵と裂開を理念化するという危険を冒しているのでしょいか？ 断片化は、それが人びとが自分自身を散り散りに消散させるどころか国家の暴力を正当化するために歴史を掘り下げることさえはじめるといった歴史的疎外の必然的帰結であるように、硬直化を生み出す可能性さえあるのです。(ローズ二〇〇三・九八)

「個性」という言葉は、生き延びるための言葉であると同時に暴力を正当化する歴史とも無縁ではないのだ。またローズのいう硬直化は、「個性」において入り込んではいけぬ現実の淵を示す「生蛮」や「アイヌ」との関係にもかわる。⁽⁸⁾すなわち、伊波が「古琉球」において「個性」を琉球史の根拠として提示する時、同時に「生蛮」や「アイヌ」は、耐えがたい植民地戦争の現実を縁取るための立ち入り禁止の標識のように、設定されている。この両者は違うということが、「個性」の存立要件なのだ。したがって、「個性」を語る言葉がないということは、この言葉が抑圧していた現実が現前に登場することであり、瑕疵を入り込んではいけぬ表象可能な淵として縁取るために用意されたこうした者たちが、新たな行動を開始する事態にほかならない。

いずれにしても、「個性」の行方や「個性」の縁取りのために現実の淵にとどめ置かれた者たちの行方を、サイードのいう瑕疵を意識しながら考えるとき、このローズの提起した暴力の正当化という批判を念頭におくことは、絶対に必要である。なぜならこの暴力の正当化の近傍で踏みとどまろうとする地点に、ファンンがいるのであり、ファンンのいう「革命の責任」が提示されているからだ。サイードのいう瑕疵は、ファンンが直面していた責任とともに検討しなければならぬのであり、伊波における「個性」を名乗ることの困難は、サイードの瑕疵を介して、ファンンの戦争状態へと連なっている。⁽⁹⁾そしてこの連なりの中でこそ、名乗ることの困難さは「精神障害」として問題化されるだろう。またかかる思想的連なりの中で、フロイトを想起することも重要である。なぜなら次の述べるように、伊波普猷にとって名乗ることの困難さは、まずはフロイトの精神分析の対象となるからだ。

3 精神分析の領域

「個性」を語る言葉がないという事態を精神分析にかかわって問題化しようとする際、最も重要なテキストは、伊波が「個性を表現すべき自分自身の言葉がない」と述べた同じ一九二四年の『沖繩教育』（二三六号）に掲載された、伊波の「琉球民族の精神分析——懸民性の新解釋」である。「私は精神分析に関する数冊の著書を播いていくうちに、この新科學の光を琉球史の研究に差し向けたらどんなものであらう、といふことを考へた。そしてヒステリ患者の精神分析をすると同一の筆法で、悲惨な歴史を有する琉球民族の精神分析をして見る気になつた」（伊波一九二四・三三）と記されているこのテキストと精神分析の關係を考へるためには、一九二四年という日付を持つこの伊波のテキストにおける文字通り「新科學の光」の痕跡と、その痕跡を精神分析の問題としてどのように考へるのかという二つの点が、とりあえず論点になる。

さて「新科學の光」の痕跡にかかわる問題を考へるとき、伊波のこのテキストでのフロイトならびに精神分析への言及において、英文学者である厨川白村による一九二一年の『改造』（三卷一号）に掲載された「苦悶の象徴」からの長文の引用があることに注意したい（伊波一九二四・一一二）。この厨川の「苦悶の象徴」は、一九二四年には同名の本として改造社から出版され、また魯迅によつて中国語に翻訳されている。厨川を介した魯迅と伊波の關係性という重大なテーマについては、いづれ考へたいと思うが、とりあえず伊波にとつて精神分析は、この「苦悶の象徴」を媒介にして登場していることに注目する。また以下に展開するように、「苦悶の象徴」と「琉球民族の精神分析」の關係は、引用部分にとどまるものではなく、きわめて複雑に入り組んでいる。またそれは、精神分析の言葉を使いながら、また同じ内容ともいえる議論を展開しながら浮かび上がる、両者の亀裂にかかわる問題でもある。

「苦悶の象徴」と「琉球民族の精神分析」の關係におけるひとつの焦点は、「琉球民族の精神分析」において始めて登場する「孤島苦」という言葉にかかわっている。「苦悶の象徴」を考へる前に、この「インゼルシユメルツ」と

ルビが打たれた「孤島苦」という言葉をとりあげたいと思う。

この「孤島苦」は「南島人」と並んで、その後の伊波の記述に頻繁の登場することになるものであり、これまでこの「孤島苦」をめぐるのは、先に言及した「南島人」と同様に、柳田國男の影響が指摘されてきた。つまり、一九二一年に沖繩を訪れた柳田が講演の中でこの言葉を使ったのであり、それをうけて伊波が「孤島苦」を用いたというわけである。またこうした柳田の影響に加え、多くの場合、そこに糖価の暴落を契機とする経済的疲弊、すなわち「ソテツ地獄」が重ねられる。「そのころソテツ地獄に直面して彼（伊波）は、啓蒙によつて沖繩の覚醒と自立を目指すという方針の限界を痛感し、絶望感に浸され始めていた」のであり、「『孤島苦』は、そういう彼にとつて、事態の総体を一語で表現し、それに明確な枠組みを与える言葉」だったのである（鹿野一九九三・一九九）。

こうした理解を念頭におきながら、先に議論をしてきた「個性」が語れないという伊波がいきついた場所に、議論を集中したいと思う。くり返すが、秩序に抗う困難さは、同時に、抗う根拠を語る言葉の困難さでもあるのだ。「ソテツ地獄」という困難な状況に対して内部から抗おうとする者にとつて、問題はやはり、名乗りにかかわっているのだ。それはまた、この「孤島苦」はあくまでも「南島人」の始まりとともに考えていかなければならないということでもあるだろう。

「琉球民族の精神分析」においては、その冒頭から「孤島苦」という言葉が登場する。それは「琉球民族は大和民族の一支族であつて、天孫降臨後間もなく南島に移住したものであるが、彼等が食物の豊富な瑞穂の国を去つて、この不自由な孤島に逃げて来たところに深い仔細がなければならぬ」としたうえで、「彼等は何らかのいきちがいひで母國を迫出されて、島伝ひ浦伝ひに南島におちのびて、所謂孤島苦を味つたのだ。をれはとりもなほさず彼らの生命が受けた最初の抑壓で、やがて彼等の心的傷害になつたのだ」というものだ（伊波一九二四・二三）。以下に示すように、「孤島苦」にかかわるこの冒頭の部分は、「古琉球」からつづく「個性」という名乗りの延長線においてこそ固有の意味をなす。

まず前段の「琉球民族は大和民族の一支族」という理解は、後の「南島人」にかかわる記述の基本的枠組みとなつ